

膀胱癌の肺および踵骨転移例

京都大学医学部泌尿器科学教室

加 藤 篤 二

神戸中央市民病院泌尿器科

玉 置 明

METASTASES OF THE BLADDER TUMOR TO THE LUNG
AND CALCANEUS: REPORT OF A CASE

Tokuji KATŌ

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

Hajime TAMAKI

From the Department of Urology, Kobe Central City Hospital

A 50-year-old woman was first found having a papillary tumor of the bladder in 1950. Since then repeated recurrence of the tumor had been treated by electrocoagulation until 1961 when partial cystectomy was performed because of a large tumor in the dome of the bladder. In 1963, she had her right leg amputated because of the metastasis to the calcaneus. In 1964, she developed extensive metastasis to the lung which became fatal.

はじめに

膀胱癌の転移部位としては、はなはだ珍しい踵骨転移を中心にして述べる。本症例は1950年から1956年までは加藤が担当し、以後1964年までは玉置が担当観察したもので経過の概要を以下に記載する。

症 例

患者：50才の女子

初診：1950年11月10日

主訴：血尿

現症：1949年10月末、血尿を突然きたしたことがある。1950年3月某大学で膀胱乳頭腫と診断され、電気凝固術をうけ、以後膀胱部にレ線照射をうけた。1950年10月再度血尿のため来院した。

当時の所見：体格中等度、栄養もよく、両腎は触れず。膀胱鏡検査で後三角部にクルミ大の有茎性乳頭腫1個を発見、青排出は両側正常。ただちに電気凝固術にて腫瘍を破壊した（当時の病理所見は第1度の移行上皮性乳頭腫で細胞の異型性に乏しかった）。以後定

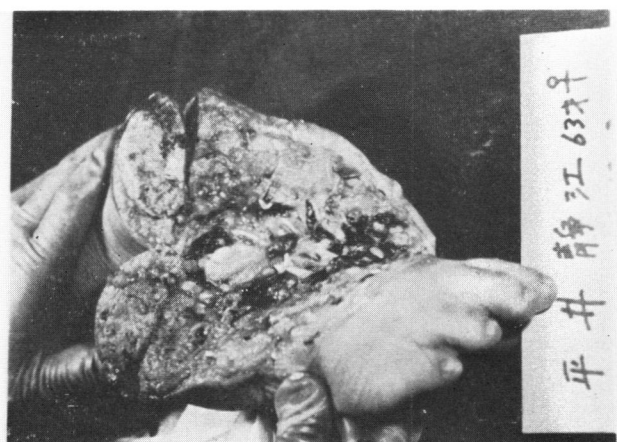
期検診で腫瘍の再発を見ず、1955年外尿道口のカルンケルを切除した。1959年6月血尿を訴えて来院、同年7月2日膀胱の左後壁に小指頭大の乳頭腫1個を認めたので電気凝固術で除去し、同年11月18日再度同一個所を焼灼した。1960年1月26日より高熱で入院、腎盂腎炎の診断で治療中膀胱頂部に米粒大乳頭腫を認めたので焼灼、同年3月9日退院。1961年1月18日頻尿、排尿痛、下腹痛の訴えで来院、膀胱炎として治療中6月9日膀胱頂部に米粒大乳頭腫2個が再発したので焼灼、7月22日同所を再度焼灼、11月6日再三焼灼、11月18日の所見では頂部は乳頭状腫瘍が指頭大で一部壊死状、当時右腰痛、右上腿神経痛を訴えていた。血圧は155/90、PSPは2時間合計49%、赤血球 491×10^4 、色素84%、白血球10,600、排泄性腎盂撮影で両腎とも正常、以上の結果膀胱頂部腫瘍を部分切除することに決し、11月13日手術を施行した。膀胱頂部外側は腹膜と密に癒着せるため一部腹膜とともに腫瘍を含む膀胱上部の約1/3を部分切除した。腫瘍は拇指大で表面乳頭状中心が壊死を呈し、割面をみると腫瘍は筋層の大部分を侵襲していたが、手術時骨盤腔リンパ節の腫脹はみられなかった。腫瘍の病理所見では細胞は移



(Fig. 1)



(Fig. 2)



(Fig. 3)

行上皮性の部分もみられるが、多くは明確な移行上皮の性格を欠き、異型度の強い腫瘍細胞集団がみられ、一部細胞は紡錘状有棘を呈して深部に侵襲している。12月27日軽快退院。その後1963年7月頃より右踵骨外側に歩行時疼痛を覚え、外踝部に拇指大のやわらかい腫脹をきたし、対症療法（コルチゾン注射）でも軽快せず悪化したので1963年9月30日整形外科に入院、整形外科の診断は Arthrosis deformans（右足関節）と Tendovaginitis chronica で9月13日用便のさい右足を強打してそのまま歩行不能になり、腫脹部の吸引で血液と乾酪様のものを認めた。右足関節の外側は暗紫色に腫脹びらんし波動を呈するも圧痛なく、局所リ

ンパ節の腫脹はない (Fig. 1)。レ線で右踵骨外側は崩壊している (Fig. 2)。胸部レ線像で左肺門部に指頭大の円形転移1個を認めた。10月2日右上腿下1/3のところでは全麻のもとに切断、踵骨はほとんど乾酪性崩壊物で占められ (Fig. 3)、脛骨の下端は皮質が菲薄、距骨もまた侵襲されていた。病理組織では腫瘍細胞は異型度が強く、未分化を示すところもあるが結論として epidermoid cancer の診断が下された。術後 Endoxan の注射をうけたが、せきが激しく中止。10月30日膀胱鏡検査では癌性変化はみられず、そのご泌尿器科へ転科、肺転移が進展して1964年1月2日64才で死の転帰をとった。

ま と め

以上のように本例は1950年膀胱に乳頭腫をきたして以後主として電気凝固術をうけたにもかかわらず再発，1961年ついに腫瘍を含む膀胱部分切除をおこなった．1963年9月右踵骨に転移をきたし，右下肢の切断手術をうけたが同時に発見された肺転移のために1964年1月死の転帰をとった．

膀胱癌の転移として血行蔓延によるものが多いがそのうち骨は頻度が高い．Stenius によると主として骨盤，脊椎，まれには外踝部，踵骨等と記載されている．またすべての腫瘍を通じて骨転移は Schönbauer によると骨盤，大腿，腰椎，肋骨，胸椎，頸，鎖骨，肩甲骨の順位であるという．一般に腫瘍の上下肢転移は部位的にも少なく，肘関節，膝関節より末梢はまれであるといわれる．筆者はかつて上顎癌で右拇指に転移をみた症例を経験しているが本例のごと

く肢末端にみられることは破格である．

成因としては本例の場合手術侵襲を転移の誘因と考えるよりも腫瘍が筋層の大部分を侵したことが主因でさらに移行上皮から表皮細胞性に化生して表皮癌の性格をもったことも助長因子といえよう．また肺と踵骨の両転移のうちいずれが先かというのを肺を素通りに踵骨へ飛躍することはありえず，むしろまず肺に転移巣が定着し，ここから血行性に遠隔部踵骨に跳躍転移 skip metastasis をして，肺のそれが發育遅々としているのに反し踵骨は可動部分であるから急速に転移が増大したと考えるのが至当のようである．

文 献

- 1) 市川ら：日泌尿会誌，43：308，1952．
- 2) 小田ら：広島医学，17：1105，1964．

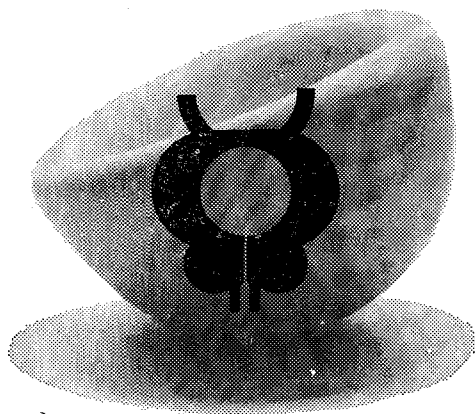
(1970年6月8日特別掲載受付)

下部尿路の排尿障害に…

新発売

非必須アミノ酸配合による
排尿障害治療剤

パラプロスト



《特徴》

1. パラプロストは性ホルモン療法にみられるような副作用はもちろんアレルギー・アナフィラキシーなど何らの副作用もありません。
2. パラプロストは耐容性が極めて大きく、長期連続投与の場合も副作用はありません。

《成分》

1 カプセル中……L-グルタミン酸 265mg
L-アラニン 100mg
日局アミノ酢酸 45mg

《適応症》

前立腺肥大に伴う排尿障害、残尿および残尿感、頻尿。

《用法・用量》

通常1回2カプセル、1日3回経口投与する。
なお、症状により適宜増減する。

《包装》 100cap. 500cap. 1,000cap.



日研化学株式会社

本社 東京都中央区日本橋通1-5
TEL (272) 8741 (大代表)